

## アトモスフィア

## ケータイ文化とヒトの能力

井上 國世\*

最近耳にしたところによると、海外出張中に携帯型のコンピュータを盗まれる事件が頻発しており、このことによる企業情報の流出が深刻な問題になっているらしい。かつて（1980年代）、わたしが民間企業に在籍していたとき、研究データを家で整理するなどの理由でも、データを社外に持ち出すことは原則として禁じられていたが、部下のひとりが特許申請書の原稿が入ったカバンを電車で忘れてなくしたことがあった。さいわい、手書き草稿があったので、そのまま大至急、特許庁に出願し、ことなきを得たが、このときの狼狽はいまも記憶に強く刻印されている。こんなことは、昨今、コンピュータを紛失することやウイルスで破壊されることに比べれば、取るに足りないことのようにみえる。わたしに、いま、このような災難がふりかかってくれば、すべての情報を失うにひとしい。

今日でも、ペーパー試験は学生を（メガネなどは許されるとしても）ほぼ裸の状態にして課している。しかし、ほとんどの人は、日常的に、携帯電話やコンピュータ、辞書、近い友人など、「外付け機能」と称してよい器具や環境に支えられて、情報を記憶し加工している。これらの外付け機能は個人の能力とは言えないが、これを構築し、利用可能な状態に保持し、利用しているのは、個人の能力である。わたしが日常的に使用している情報は、自分の体に保持している量に比べて、外付けに依存している方が格段に大きい。むしろ、前者を可能な限り少なくしようと勤めている。どうしても記憶しておかなければならない情報が多すぎると、たとえ覚えてもどうせすぐ忘れてしまうので、無理に覚えようとしないう方が無難である。かくして、一日中ラインにぶら下がったままの過剰なライン依存症に陥ることになる。ラインから離れてみると、何も知らない、何もできないただのオヤジである。

一方、若者が必要な情報をコンピュータから取り出し、加工する手際良さには驚嘆させられる。コンピュータに疎いわたしには、かれらのような真似はできないが、それでも情報の保管と計算はすべてコンピュータにお任せした方が確実である。結局、わたしがやるべきことは、プロの実験屋として「情報の一次生産」（肉体労働）とそれの簡単な加工である。

携帯電話の着信音が講義中に鳴ることは、ひところよりマシになったが、それでも日常茶飯である。最近では携帯電話は飛躍的な進歩をとげ、「ケータイ」と呼ばれる新たなコンピュータとなりつつある。これに基づく新しい文化が形成されつつあるようにも見える。かくなる上は、携帯電話や小型コンピュータなどの外付け装置の使用を許可した試験の方が、学生の実際的な能力を観ることができないだろうか。これらの外付け装置の最大の弱点は、わたしの物忘れ癖を根本的に改善できない点であり、体内埋め込み型にでもしないかぎり、いつか確実に紛失するのではという心配からは開放されない点である。

私自身、一応、心がけていることは以下の三点：ひとつ、できるだけラインから降りて自分のアタマで考える。ふたつ、コンピュータ内の情報はマメに整理整頓する。みつつ、外出するときはなくしても困らない程度の情報しか持ち歩かない。

\*京都大学大学院農学研究科食品生物科学専攻・教授